

端午の節句が近くなり、しまい込んでいた兜や人形を出して、床の間に飾った。長男は、兜と刀と弓矢。次男はガラスケースに入った弁慶で、お節句の間だけケースから出して飾る。そして肝心の戦争末期に生まれた主人の神武天皇の人形。物が無かった時代だが、なかなか立派で、八咫鳥を、左手に持った棹の先にとまらせ、右手には矢を二本持つている。

旗指物もそれぞれにあるので、床の間一杯になりとても賑やかだ。

子供たちが小さい頃は、兜をかぶったり、刀や弓矢を振り回して遊んだものだった。

今では飾っておくと、その間に一回位息子たちが来て戯れていくが、後は誰も入らぬ客間で人形はひっそりと鎮座している。

たまたま夜になって、客間の襖を開けた。

その時、真つ暗な部屋から妖気が漂ってきてギョツとした。部屋の中の空気はどんよりと密度が濃くなったようで、何故か、入り口からは見えない床の間にある人形が頭に浮かんだ。

以前、東北旅行に行った時に何か所かで見た『おしら様』を思い浮かべ、あの時も同じように妖気を感じてギョツとした記憶がある。

一番印象に残っているのは遠野にあった伝承園だ。

一つ家の中に馬小屋もある、この地方特有の曲がり屋で、細く暗い廊下を行った先の引き戸を開けると、赤い着物を着た千体もの人形が段々に飾られていた。人形は二体一对で、男と馬、女と馬だったようだ。千体のそれぞれが家の神で、蚕の神、農業の神、馬の神など、信仰の対象らしい。

らしい、というのは、私はその妖気に当てられておびえてしまい、早々にその場を立ち去ったからよく見ていないのだ。

人々は、それらの人形に、人間はもとより、家畜の安全、お天気のこと、身の回りの幸せ、なんでもかんでも託したのだろう。その思いが、おしら様の周りに充満していたのだろう。

我が家の五月人形にも、おそらく周りのものの過剰な期待と願いがこもって、あのような妖気を漂わせていたのに違いない。

おお怖い！